

はじめに

本博士学位請求論文は、近世前期の文学を対象として明末文化の影響を指摘し、その意味や価値を考察することに目標を置いている。

明末文化の影響を主題とした結果として、全体としては、漢文学に関する論考や資料紹介が中心を占めることになった。しかし、そもそもの興味の出发点は漢文学に限定したのではなく、芭蕉の俳諧に見られる隠逸的な指向の背後にあるものを探ることにあつた。

本論

「第一章 天和期の芭蕉」では、天和二年（一六八二）二月上旬の木因苑芭蕉書簡の中に見られる「鳶の付合」を取り上げ、この付合における芭蕉の作意の再検討を試みた。従来は「遊戯的」と評されてきたこの付合には、一人の個人的な隠遁者の面影が描き出されており、じつはそれは芭蕉自身の姿だったのではないか、すなわち、この付合は、自らの理想の姿を模索する芭蕉の自画像なのではないか、とする解釈を示した。さて、近世文学において「隠逸」は、重要な主題の一つである。様々な作品で、隠逸・隠者がテーマとなるし、近世の作品と『徒然草』や『撰集抄』との接点を探る論考も多い。もつと広く捉えれば、「見立て」や「やつし」といった理念的な問題とも関連性を指摘することが可能だろう。

そうした問題を考える際に重要な出发点となり得るのは、近世前期において最先端の知識人であつた林家林門の人々が持っていた隠逸観を探ることではないか。そういう問題意識で、『古今逸士伝』（万治四年（一六六一）序）、『本朝遯史』（万治四年成、寛文四年（一六六四）刊）『扶桑隠逸伝』（寛文四年刊）について検討を加えた。その論考が、第二章から第四章である。

「第二章 『古今逸士伝』考」では、従来は研究の俎上に載せられたことのなかつた『古今逸士伝』を取り上げ、その典拠や編集の方針を検討し、あわせて編者である野間三竹の「隠逸」に対する意識を考察した。三竹は、『古今逸士伝』を編集する際に、老荘・仏教や怪異・怪譚といった「異端」の要素を排除しており、それは曲直瀬道三・玄朔流の医家としての三竹の意識と結びついていたことを指摘した。

「第三章 『本朝遯史』編纂の方法」では、読耕齋が『本朝遯史』編纂の際に拠つた文献を明らかにし、読耕齋の撰述意識には、歴史的客観性に対する配慮がうかがえること、また三竹と同様「異端」を排除して儒教道徳を鼓吹する要素が見られることを指摘した。このことから、『本朝遯史』は、中国の儒教的隠逸観の影響のもと、近世における新しい隠逸観を提示した書であり、同時に、自らが影響を受けた中国の隠逸伝を、歴史的客観性において越えてゆこうとする積極的な性格をも備えた書であつたと位置付けた。

「第四章 『本朝遯史』における隠逸観の検討」では、読耕齋が中国の正史に載る隠逸伝から影響を受けていたことを指摘した上で、『扶桑隠逸伝』と『本朝遯史』の記述を比較した。その結果、「我が身の不遇からやむをえず隠逸した人物」に対する共感と、その人物を取り巻く社会の在り方への関心が存在することが『本朝遯史』の特色であるとし、『扶桑隠逸伝』と『本朝遯史』の違いには、同時代の仮名草子の教義問答体草子、とくに儒仏論争に関する作品の持つ問題と共通する要素があることを指摘した。

以上の問題を検討する過程で、林家林門の人々が明末の「山人派」の文化に敏感に反応していたことを知つた。そのことを検討した結果が、第五章～第七章である。

「第五章 近世前期における『遵生八牋』受容」では、林読耕齋、野間三竹、石川丈山らの文芸活動に見られる遊戯的な側面について検討し、その背景に『遵生八牋』（万曆十九年（一五九一）刊）の影響があつたことを指摘した。『遵生八牋』は養生書とされるが、そこに描かれた理想的な生活スタイルは、中国の知識人・士大夫のものである。あわせて、読耕齋が『菜根譚』も読んでいたことを指摘し、彼らの文芸活動が、

じつは、これまでは近世中期以降のこととされてきた「江戸文人」の時代を先取りするものであったと結論づけた。

「第六章 近世前期における陳継儒の影響」では、明末に活躍した山人派の文人たちを代表する人物である陳継儒の影響を検討した。折からの商業出版の発展に乗って『宝顔堂秘笈』（万暦三十四年（一六〇六））泰昌元年（一六二〇）をはじめ多くの書物を出版し活躍した陳継儒の著作が早速日本にも舶載されて、林鷲峰、読耕齋、野間三竹、石川丈山らの文芸活動に影響を与えていたことを指摘した。

「第七章 近世前期における明末「随筆」の受容」では、陳継儒たち山人派の著作の影響が、三竹たちの「随筆」に対する意識を喚起していたこと、読耕齋の『本朝遼史』で兼好の『徒然草』を「随筆」と呼んでいることを指摘し、『徒然草』は、和文で書かれた日本の古典でありながら、儒者や医者など、漢学者たちによって、最初に「随筆」としての面白さが「発見」された作品であると結論付けた。

さらに、明末出版文化の影響下における、近世前期の日本の詩学・詩論・詩作のあり方の一端を検討した。その論考が第八章から十一章である。

「第八章 『本朝詩英』小考」では、三竹の『本朝詩英』（寛文九年（一六六九）刊）に収録された作品の出典を検討した。今までは、漠然と勅選三集などを撰集の材料としたと考えられていたが、じつは『経国集』は参照されていなかったこと、鷲峰の『本朝一人一首』（寛文五年刊）が撰集の材料として使用されていたことを明らかにした。併せて、出典を調査した結果を、「第八章付録 『本朝詩英』所収詩出典一覧」としてまとめた。

「第九章 『童蒙詩式』考」では、伝本の比較的少ない『童蒙詩式』を調査し、その内容のほとんどが、明の梁橋編『氷川詩式』（嘉靖二十四年（一五四五）刊）に拠っていたこと、そして異版が存在することを明らかにした。あわせてその流布の状況について検討し、『氷川詩式』を利用したことの背景や意義について考察した。『氷川詩式』は、明末出版文化の盛行によって日本にもたらされた書物である。つまり、近世前期の詩論は、明末出版文化の強い影響下にあったということになる。

「第十章 『北山紀聞』巻四「詩格」と『氷川詩式』」では、近年偽書であることが明らかになった『北山紀聞』（元禄五年（一六九二）刊）に収録されている「詩格」の内容を調査し、その記述が『氷川詩式』に拠っていたことを明らかにした。前章と同様、このことは、近世前期の詩論が、明末出版文化の強い影響下にあったことを示す事例であると指摘した。

「第十一章 丈山の杜甫受容」では、丈山の漢詩に詠まれた「拙」をキーワードとして、丈山の杜甫受容について検討を加えた。従来、丈山の杜甫理解については、中村幸彦氏によって、当時舶載されていた中国の詩話・類書からの影響が強いことが指摘されていた。しかし、検討の結果、丈山の杜甫への興味・共感は、中国の詩話・類書によく見られる「忠君愛国」の詩人としての面ではなく、その隠逸的な側面に向けられていることが明らかになった。また、自らの閑居生活を杜甫のそれに準える意識が強くあったことも指摘することができた。当時一般の杜甫理解に照らして、このことは丈山の杜甫理解の特徴と結論付けた。

なお、明末文化の影響を考える際に、俳諧史・美術史との関連で非常に重要な事象となるのが、詩箋の受容という問題である。「第十二章 多色摺と俳諧の世界」では、初期色摺本の刊行から、詩箋の流入、俳諧一枚摺発生、俳諧の多色摺の展開、という一連の流れについて解説し、これまでの研究結果をふまえてその意義を論じた。すなわち、俳諧一枚摺の歴史と享受者層の広がりを考えると、まず俳諧を楽しむ幅広い需要があつて、その需要に応じてさまざまな多色摺版画が制作されていくうち、錦絵や狂歌摺物に代表されるような、高度な技術や洗練された造形意識というものが花開いたのではないかと結論付けた。

第十三章以降は、第十二章までの論考に関連する資料紹介を中心に構成した。羅山の詩箋資料や、従来その存在が知られていなかった井川春良（西尾藩儒臣）の『兼山詩文』など、重要と思われる文献を翻刻紹介し、さらに事跡の整理されていなかった野間三竹の年譜を作成した。以下、それぞれの概要を示す。

「第十三章 林永喜「寛永十五年の夏」和歌懐紙の紹介」では、その詩文集・歌集が伝わらず、従来ほとんど注目されることがなかった林永喜の最晩年の懐紙（個人蔵）を翻刻紹介し、その事跡をまとめた。また、永喜の遺墨に関する記述を『鷲峰林学士文集』と『国史館日録』から紹介した。

「第十四章 翻刻『文敏先生遺墨』」では、羅山が孫の梅洞に与えた詩懐紙二十五枚（個人蔵）を翻刻紹介した。これは、林家資料として注目されるだけでなく、明末詩箋の日本への伝来と流布を示す具体例として貴重である。すなわち、明末の彩色摺詩箋に揮毫されたものが八枚含まれている。梅洞は、承応元年（一六五二）に『毛詩』二十巻を口授されるとともに、羅山から「禄寿名」の三字を授けられ、詩作を促がされたという。そして、翌承応二年八月、はじめて小絶一首を作った。それを見た羅山は、驚き喜んでこれに和韻している。その後も二人の応酬は続く。本資料に収録された最後の懐紙は、羅山が亡くなる明暦三年の正月のものである。

「第十五章 野間三竹年譜稿」では、野間三竹の伝記的な事実に関する確実な事項を集め、その年譜稿を作成した。主として林家の詩文集に見える三竹の足跡を求めたものである。野間三竹は、近世前期に活動した医者・漢学者である。三竹に注目する理由は、近世前期における漢学者・知識人の、文人的な側面をよく具現化した存在と考えるからである。

「第十六章 人見竹洞書簡（十月十二日付、前田綱紀宛の紹介と考察）」では、人見竹洞が前田綱紀（金沢藩第五代藩主・松雲公）に宛てた書簡一通（個人蔵）を翻刻紹介した。当該書簡は、短いものであるが、竹洞と綱紀との関係が生じた寛文七年のものと考えられ、内容も野間三竹の『本朝詩英』に触れるなど興味深い内容を持つ。併せて、『国史館日録』の記述を追うことで、林家と前田家の交流の一端を明らかにした。

「第十七章 翻刻『童蒙詩式』」では、寛文年間に刊行された詩作法書『童蒙詩式』（個人蔵）を翻刻した。『童蒙詩式』は、寛文の『書籍目録』に名前が見えるものの、『国書総目録』には所在が記載されず、その内容は不明であった。現在公開中の国文学研究資料館のデータベースにも、「古典籍総合目録データベース」に一本（岡山大学業合文庫蔵本）、「日本古典資料調査データベース」に一本（磐田市教育委員会蔵本）が載るのみであるが、機会を得て個人蔵の二本を調査し、これを翻刻した。

「第十八章 翻刻『修蘭抄』」では、丈山の撰述した園芸書『修蘭抄』（個人蔵）を翻刻した。『新編覆醤集』にはその跋文のみが収録されているが、刊行された様子はなく、伝来も稀である。今まで伝本としてその存在が確認できたものは祐徳稲荷神社中川文庫蔵本のみであったが、機会を得て、新出の写本（江戸時代前期頃写、個人蔵）を調査し、これを翻刻した。本書の内容は、『遵生八牋』中の「燕閑清賞牋」に載る「蘭譜」の記述を和訳したものである。

「第十九章 石川子復自筆懐紙（延宝二年一月付）の紹介」では、幼時から石川丈山に近侍し、没後は『新編覆醤集』を編纂するなど、その顕彰に大きな功績のあった石川子復（重昌、生没年未詳）の自筆懐紙（個人蔵）を翻刻紹介した。子復の作品は詩文集としては残っておらず、関連する資料も少ないため、本資料は貴重である。

「第二十章 菊池耕斎「本多美作守藤原忠相墓誌銘」の紹介」では、菊池耕斎が記した、三河西端の藩祖、本多忠相の墓誌銘を翻刻紹介した。この墓誌銘は、『耕斎全集』（写本、国立公文書館内閣文庫蔵）中に「藤原忠相君墓誌銘」（「耕斎文章」巻六「雑著」所収）として見えるものだが、本稿で紹介したものは、その清書本と考えられる卷子本一卷（個人蔵）である。元箱と考えられる漆塗りの箱と共に伝存したことも貴重である。

「第二十一章 井川春良『兼山詩文』」では、西尾藩に仕えた近世前期の儒者、井川春良の詩文集『兼山詩文』を翻刻紹介した。春良は、従来、儒者としてはあまり注目されることがなかったが、幕初に老中・大老を歴任した土井大炊頭利勝の伝記資料「利勝公遺事」を著したことが知られている。従来、注目されることなかったのは、その詩文集が伝わらず、その人の活動や思想を具体的に伝えるものがなかったからであ

ろ。春良が活動した時期は、元和偃武以後、文運が隆盛に向かったとされる時期である。しかし、この時期には、邦人詩文集の刊行されたものは未だ少なく、写本で伝存するものも極めて稀である。『兼山詩文』には、春良の延宝四年（一六七六）末から天和三年（一六八三）冬までの作品を収録するが、近世前期の儒臣の生活や信条をうかがい知ることのできる資料として、伝存する類例の乏しい貴重なものである。

「第二十二章 鈴木秋峯宛書簡・詩懷紙十一通」では、幕府作事奉行配下の御大工頭であった鈴木長兵衛長頼に贈られた詩懷紙と書簡（元禄頃）、計十一通を翻刻紹介した。長頼は、林家や人見家の儒者たち、また石田未琢らの俳人たちと交際したことが知られ、自身も『桑華詩編』を始め、いくつかの著述を残している。ただし、その文事についての先行研究は乏しく、この詩懷紙も、その活動の一端を示す資料として貴重である。なお、注目すべきは、明末の中国大陸から日本に舶載されて人気であった詩箋が、本資料中に五枚含まれている点である。多色摺資料としての詩箋の流布を示す事例としても貴重である。

本研究の位置付けと今後の展望

最後に、以上の研究とこれまでの近世漢文学研究との接点、それから今後の研究の課題をまとめてみたい。そもそも、従来の近世漢文学の研究は、中期以後をその対象とすることが多い。前期では朱子学の導入という思想上の問題が大きく扱われるものの、文学的・文化的な側面は考察されることが少なかった。また石川丈山や深草元政が好意的に取り上げられることがあっても、羅山や鷺峰ら林家の人々に対する文学面での評価は低かった。たとえば、中村幸彦氏は、つぎのように指摘している。

儒者達にとって詩は閑文字で、風流はその生活の閑境に存した近世初期に於いて、真の詩は、人生を閑境においた隠者の中に存したのである。由来、この頃の詩をいう者、先ず指を、洛北詩仙堂の隠者石川丈山と、洛南霞谷の行者元政上人に屈する。（中略）羅山や鷺峰の行状年譜を見るに、又杏庵、活所等の伝記を按ずるに、この頃の儒者の最大の仕事は、漢籍に訓点をほどこし、漢籍から政治経済上に有益な事どもを抄出して、為政者達に役立てる、所謂啓蒙期らしい仕事であった。（中略）元禄に近づくると儒学界の様相は漸く変じてくる。実用の儒学から、人間のあり方に関心がむく。啓蒙期を離れて本格的な人間学としての儒学が究明され出すのである。（中略）ひるがえって林家を見ると、鷺峰は幕府への忠勤と、自家の繁栄を願って、延宝年間まで努力しているが、彼の学問は当用の学で、文学は装飾であった。鷺峰の考えのどこからも真実の学問と文学は出てこなかった。林家の衰運はこの辺に根ざしているようである。新しい学問と文学は、人間と現実と根拠において、既成の学を疑い、反抗した人々の側から生れてくるのである。

（「第七章 近世初期の漢文学」『中村幸彦著述集』第七卷 中央公論社 昭和59年3月、初出『国語と国文学』第三六〇号、東京大学国語国文学会、至文堂、昭和29年4月）

以上の指摘の根底には、文学に対するいささか偏狭な見方が存在するように思う。この論考で指摘されている近世前期の漢文学に対する分析は正しいかもしれないが、「鷺峰の考えのどこからも真実の学問と文学は出てこなかった」という批評は、やはり独善的であろう。

ともあれ、近世前期の漢文学がこれまで積極的に研究されてこなかった理由を整理すると、以下の三点に集約することができるのではなからうか。

（Ⅰ）従来の近世漢文学研究では、詩文の研究に重きがおかれた。そのため、漢文学者が漢詩人として活動することが顕著となる近世中期以降（すなわち荻生徂徠の「廻園派」以降）の諸派の漢学者たちが主たる研究対象とされてきた。

（Ⅱ）近世前期に活躍した林家林門の漢学者たちは、権力に近い存在であったため、詩文を「社交風流」の具にしていたに過ぎないという先入観（前掲、中村幸彦「近世初期の漢文学」など）が持たれていた。

（Ⅲ）近世前期の漢文学の指導的立場を占めた林家林門の詩集・文集は膨大な分量であるため、全体を見渡

した分析を行うことが困難である。すなわち、羅山・鷺峰・読耕齋・梅洞・鳳岡らの詩文集に目を通し、併せて多数存在する同時代の漢学者たちの文献の調査・発見・翻刻も行う必要がある。しかし、羅山から鳳岡までの時代の林家の詩文集のうち、すでに影印・翻刻がなされているものは、羅山の詩集・文集（翻刻）と鷺峰の文集（影印）のみである。

こうした今までの研究状況に対して、この論文では、近世前期における明末文化の影響と、林家を中心とした文芸交遊圏に注目することを試みた。すなわち、近世前期の林家林門の漢学者たちのネットワークが、明末の中国で活躍した「山人派」文人たちの隠逸趣味・文人趣味から強く影響を受けていたことを検証することを目的とした。そして、従来は近世中期以降の問題とされてきた「江戸文人」の萌芽を、早く近世前期の林家林門に見出すことができるという結論にたどり着いた。

このことは、先に指摘した（Ⅰ）の見方のように「詩人」として近世前期の漢文学者たちを評価しようとするのではなく、広く文化的な価値観で林家林門の漢文学者たちを評価しようとした結果である。

また、文人趣味の萌芽を近世前期の林家林門に見出したことは、彼らに対する（Ⅱ）のような偏った考え方を見直す結果となった。たとえば、たしかに丈山は詩人としては他の林家林門の面々より優れていたかもしれないが、けつして孤高の存在であったわけではなく、しっかりと「社交風流」の世界にも遊んでいたことが明らかになった。また、反対に鷺峰や読耕齋など林家の面々にも、隠逸に対する関心や憧れが存在したことも確認できた。

さらに、多色摺資料として美術史・俳諧史との関連からも重要視される詩箋や、従来その存在自体が知られていなかった井川春良（西尾藩儒臣）の『兼山詩文』など、以上の検討の過程で見出すことができた貴重な文献を翻刻・紹介した。また、事跡の整理されていなかった野間三竹の年譜を作成した。これらは（Ⅲ）に指摘した研究環境の不足を多少なり補うものである。

さて、今後の展望だが、やはり以上のような方向性で検討を重ねていくことが、これからも有効的であると考えられる。まだまだ問題として取り上げるべき資料には事欠かない。つまり、（Ⅲ）に指摘した研究環境の不足は、まだ何ら根本的な解決を見たわけではない。

また、未開拓の問題として、黄檗文化の影響を検討する必要があるだろう。日本に流入してきた黄檗文化も、広い意味では明末文化の一端かもしれない。しかし、その影響の大きさを考えてみれば、やはりそれとして本格的に取り組んで検討しなければならない問題である。今後の課題としたい。

以上